

6. 農家民泊、農業観光、産地直売を束ねた「達者村」ブランドで交流人口増
 ～農家民泊、農業観光、産地直売等を組合せた「バーチャル・ビレッジ」～
 青森県南部町 達者村

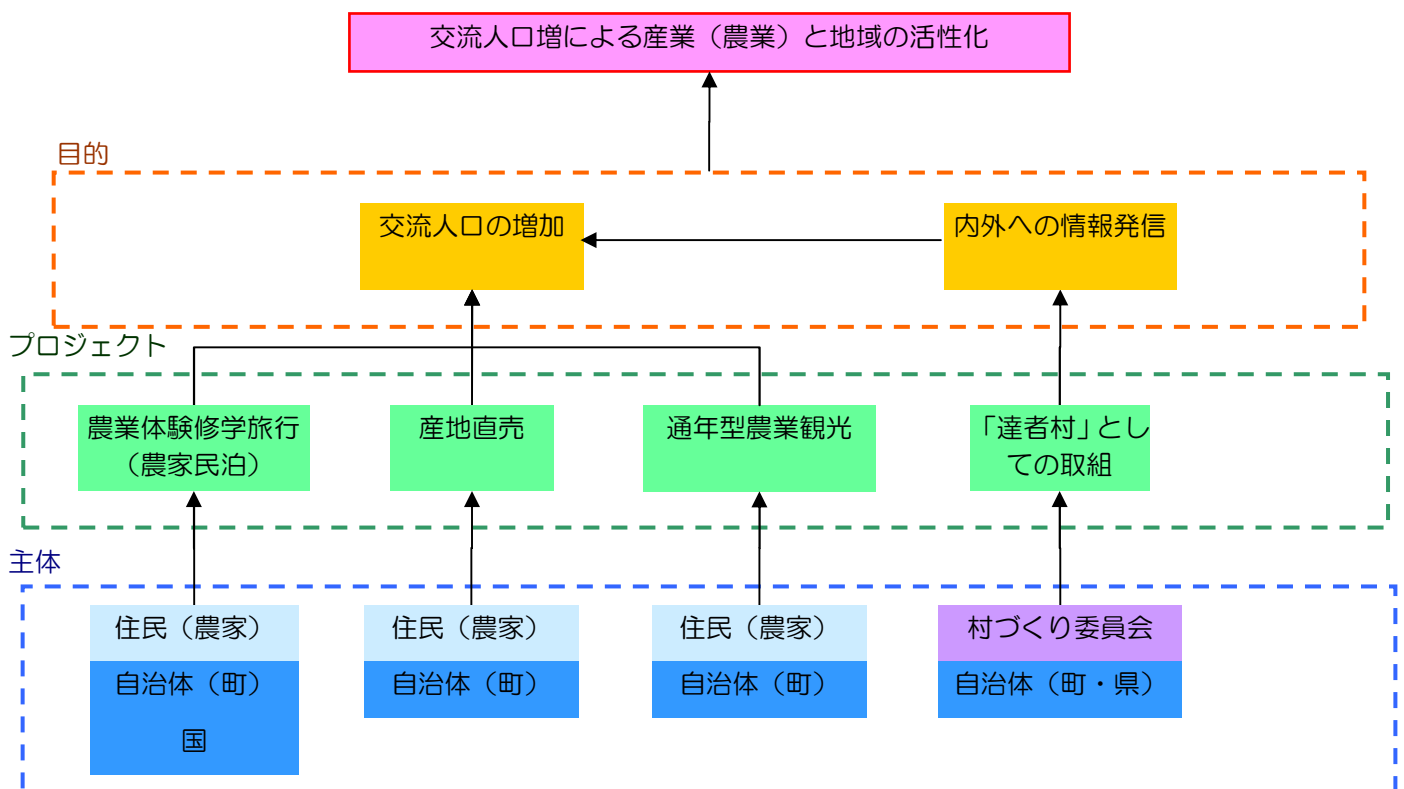
解決すべき課題

経済	商工業の振興
	農林業の振興
	観光の振興
経済・社会	雇用の確保
	中心市街地の活性化
社会	定住人口の増加
	アクセシビリティの向上
	地域の荒廃の抑制
環境	環境負荷の低減

事業概要

それまで農家や自治体らが個別に取り組んできた産地直売、農家民泊、農業観光（さくらんぼ狩り等）など、農業を活かした交流を「達者村」というブランドのもとに実施。
 内外からの注目を集め、交流人口が拡大しており、さらに、定住人口増に向けた取組も始まっている。

プロジェクトパッケージの構造図



プロジェクトの背景

南部町は、青森県東南部に位置し、2006年（平成18年）に旧名川町、南部町、福地村が合併して誕生した、農業を基幹産業とする町である。しかし、人口減少や少子高齢化が進むとともに、この30年間で農業従事者数が半減し、経営耕地面積も2割以上減少するなど、農業の衰退が続いている。このままでは農業が産業として成り立たないという懸念が強くなり、1986年（昭和61年）頃からさくらんぼ狩り等の農業観光が、1991年（平成3年）から農産物産地直売が、1993年（平成5年）から「農業体験修学旅行（農家民泊）」が、それぞれ始まるなど、交流事業を核とした地域の活性化の取組が行われてきた。

2002年（平成14年）、近隣の八戸市まで新幹線が開通し、交流人口のさらなる拡大が期待されたことから、さくらんぼ狩りだけではなく、様々な農作物の管理・収穫作業を体験してもらい、通年型の農業観光がスタートした。翌2003年（平成15年）、県が「あおりリズム創造プロジェクト」を提唱。町はこのプロジェクトをともに進め、町民有志らによるワーキング・グループでの議論を踏まえ、2004年（平成16年）に、パーチャル・ビレッジ「達者村」を開村することとなった。

本事例における「パッケージ化」

- 地域資源を活かした来訪者と住民の交流を深めることを目的として、既存の農業観光、産地直売、農家民泊などの取組を含め、様々な交流事業を「達者村」というブランドでパッケージ化。
- 住民代表35人、役場職員12人による「達者村づくり委員会」を設置。5つの部会を設置して、活動方針や新たな事業等を検討している。また、旅行会社や旅行雑誌編集者などからなる「あおりリズムアドバイザー」から助言を得ている。

(1) プロジェクトの内容

① 通年型農業観光

果樹、特にサクランボの栽培が盛んであることを活かして町を活性化しようと1986年（昭和61年）に始めた「さくらんぼまつり（現・さくらんぼ狩り）」が発端。6月末から約一カ月間、サクランボ狩りを体験してもらうもので、好評を博した。2002年（平成14年）からは通年化した「農業観光 四季のまつり」という名前で実施されており、サクランボに加えてりんご、梅、桃、梨、ぶどうなどの授粉、剪定、収穫等、様々なメニューを提供し、年間75,000人程度が訪れている。

② 産地直売

1986年（昭和61年）、農家婦人による特産品研究会の発足を契機に、町内の果実等を活用したジュース等の加工品開発と商品化が行われるようになった。しかし、販売施設がないことが課題となっていたことから、1991年（平成3年）に農産物産地直売施設を整備す

るとともに、その運営組織も設立され、フリーマーケット方式による産地直売が始まった。

現在では町内に公設・民設を含め 5 箇所の産地直売施設があり、年間総売上は約 5 億円にのぼっている。

③農業体験修学旅行（農家民泊）

学校などから中学・高校生の農家民泊を受け入れる事業で、1993 年（平成 5 年）に農水省のグリーン・ツーリズム事業のモデル整備構想策定地区に指定されたのを機に始まった。

南部町、三戸町、田子町、八戸市、階上町からなる「三八地方農業観光振興協議会」を設置。会員農家は旅館業法上の簡易宿所の営業許可を取得し、宿泊客を受け入れている。協議会では、ホスピタリティ向上のための研修会や継続的な実施を呼びかけるための学校訪問等を行っている。受入は 2 泊 3 日が原則で、農作業体験や各農家独自の献立による食事などを楽しむことが出来る。



写真 1：収穫したサクランボを箱詰め体験（南部町提供）

④「達者村」としての取組

バーチャル・ビレッジ「達者村」として情報発信をしており、例えば地元テレビ局で 3 分間のミニ番組のシリーズを制作し、放映したこともある（インターネット上でも配信）。

また、上記①～③以外の取組として、以下のような様々な取組を行っている。

- ・ 達者村特産品認証制度：町民が製造・販売する特産品を審査・認証する制度。認証を受けると商品に達者村の専用ロゴを貼付することができるようになる。
- ・ 達者村三十六景：「富嶽三十六景」に倣ったもので、当初三十六景であったが町村合併を機に百景に拡大。豊かな自然や田園風景など、美しい景観ポイントを選定し、町民の共有財産として内外に発信。
- ・ 達者村花壇コンクール：町を訪れる人を美しい花で迎え入れるために、町内の団体が花壇やプランターの整備を競う。
- ・ 子ども農山漁村交流プロジェクト先導型モデル地域：文科省・農水省・総務省の連携事業で、小学生の体験宿泊を受け入れる（2008～2009 年度（平成 20～21 年度）に実施）。農家民泊は中学・高校の修学旅行が中心であるが、誘客数と受入期間の拡大を狙って導入された。
- ・ 達者村“ずっぱど”農園：プロの指導者（農協職員 OB）の下、20 数名の参加者が共同で農作業を行う共同管理農園。
- ・ 達者村検定：地域住民及び町に関心を寄せる人々が、地域の歴史や伝統、文化、産業などの地域資源につ



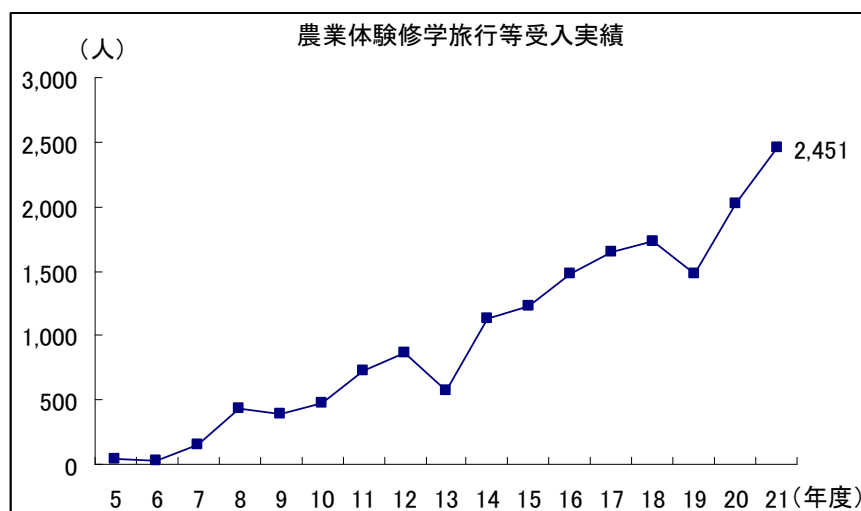
写真 2：訪れる人々との交流（南部町提供）

いて学び「達者度」を高め、一体感ある情報発信につなげることを目的に、ご当地検定事業を実施。

(2) 効果

①交流人口の増加

農家民泊は初年度（1993 年度（平成 5 年度））の受入は 1 団体・38 名だったが、その後増加が続いており、2009 年度（平成 21 年度）は 24 団体・2,451 名（南部町以外での受入を含む）となっている。



注：「三八地方農業観光振興協議会」の実績（南部町以外の受入数を含む）

出典：南部町「グリーン・ツーリズムの里 南部町」

②内外への情報発信

これまで多くのメディア等に取り上げられてきた。また、南部町は 2006 年（平成 18 年）に町村合併を行っているため、達者村の取組を全町民に周知するために同年、「達者村振興計画」を策定。

(3) 成功要因

①「達者村づくり委員会」を通じた住民の主体的な取組み

南部町には、産地直売を行う農家婦人による「名川チェリーセンター101 人会」、農業観光を担う「達者村農業観光振興会」、農家民泊を受け入れる農家による「達者村ホームステイ連絡協議会」など様々な活動団体が形成されている。

一方でこうした団体の代表を始めとする町民が参加する「達者村づくり委員会」では、「企画・宣伝」「宿泊研修」



写真3：達者村づくり委員会
(南部町提供)

「施設管理・環境整備」「体験・達人」「認証産品開発販売促進」の5部会に分かれて、新たな事業や戦略を検討している。そしてここで検討された事業はそれぞれの団体や町役場によって事業化されていく。

また、役場職員もメンバーとして参加することで、全国の様々な事例や制度を紹介しながら、法や規制に触れない形で取組を形にすることを支援している。

②「達者村」という統一ブランド確立による効果的な情報発信

特産品や宿泊を受け入れる農家など、様々な形で「達者村」のブランドが使用されている。グリーン・ツーリズムを実施している地域は全国に数多く、ややもするとその中で埋没してしまう可能性もある。そうしたなかで南部町は、「達者村」という秀逸なネーミング（訪れる人も住民も互いに達者になろうというメッセージがそこには込められている）とロゴマークを事業横断的に活用することで、その存在感を高めていると考えられる。

(4) 今後の課題

「達者村」では交流人口の拡大とともに、それを将来的な長期滞在・定住につなげる「究極のグリーン・ツーリズム」を目指している。そのため、人材派遣企業と連携した「農業インターンプロジェクト」や県と連携した「おためしライフ」事業（夫婦に長期滞在してもらう）、希望者に住居を紹介するための「空き家バンク」制度などをこれまで実施してきた。しかし、積雪寒冷地の農村環境には厳しい面（寒いこと、農作業には辛い面があること、仕事やボランティア、娯楽の機会が都会と比べて少ないこと等）もあることから、定住の拡大は今後の課題となっている。

関係リンク先

達者村ホームページ

<http://www.nanbu.net.pref.aomori.jp/tassya-mura/>

南部町ホームページ

<http://www.nanbu-town.net.pref.aomori.jp/sight/00000011/index.html>